

本日休業

かもしれない

山本久美子画



高橋秀雄

「お帰り」

背中が声をした。ピクツとして振り返る。いつもは、目が合ったときだけ挨拶する「おそうじばあさん」だった。

腰が九〇度くらいに曲がっていて、下を向いていて小さいから、わきを通っても気が付かないことが多い。たいてい、事務所の前の花壇で何かしているか、道端で短いホウキを動かしている。だから「おそうじばあさん」。

今日も短いホウキで、木の葉や砂利を事務所の方へはいている。いつものように、道路まできれいにしているように見えた。背中にくっつけたみたいになり取りも持っている。ばあさんの周りでめだつようなゴミを見たことがない。つられて、ただいまと返事したけど、聞こえたかどうか……。ばあさんもそのまま、ガラスのドアに金文字で「岩

田造園」と書かれた事務所の中に入ってしまった。

いつも元気だ。動きのいいホウキではかれたら、飛ばされてしまうくらい、力強い動きだ。ふと、もう一度はあさんを見たくなって、足を止め、振り返ったときだった。

とつぜん、この風景や音が、自分とつながったような不思議な気分になった。今まで眠っていたのか、今、目が覚めたのか、そんなことまであわてて確かめている。

コンコンとガードレールを指ではじきながら歩いて来た。ガードレールの向こうは、幅二メートルほどのコンクリートに囲われた新川が流れている。

新川は深くないけど、底は自然のままだから、さざ波が立っている。だけど、六月の午後、どんよりとした雲の下、日差しはなくなくて、キラキラ光ることもない。